



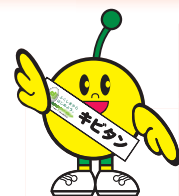
～未来をつくる子どもたちの豊かな心をはぐくむために～

# 道徳のとびら



「おはよう」「いただきます」というあいさつ。「ありがとう」「ごめんなさい」という素直な言葉。雨上がりの虹に、凍てつく夜空に輝く満天の星に、ふと目を奪われる。美しいものを美しいと感じ、他の人の悲しみに心を寄せる。こうした豊かな心は、毎日の生活の中ではぐまれていきます。子どもたちが成長していく中、その基盤になるのは家庭生活であり、「家庭教育は全ての教育の出発点」とも言われています。未来をつくる子どもたちの豊かな心を、家庭・地域・学校とで共に育てていきたいと考えています。

## 《先生方も研修をスタート！》



# ふくしまの道徳教育

道徳教育を推進し、子どもたちの豊かな心をはぐくむための取組を紹介します。

平成30年度から（中学校は平成31年度から）「特別の教科」として実施する道徳について、県内全ての小学校と小学部のある特別支援学校の先生方を対象に、研修会を行いました。

研修会では、今までの「道徳の時間」とどう違うのか、どんな準備が必要なのか等をグループごとに話し合い、発表していきました。子どもたちが主体的に意見を述べ合い、議論するこれからの「道徳科」の授業の在り方について、先生方も主体的に議論を深めていました。



今後、この研修会に参加した先生方が中心になり、各学校において研修や道徳科の準備等を進めていきます。

## ぜひ、ご覧ください！ ふくしま道徳教育資料集！

平成24年から3年間かけて作成した「ふくしま道徳教育資料集」を、平成27年に補訂し、県内全ての小・中・特別支援・高等学校及び大学に配布しました。

この資料集は、東日本大震災を踏まえ、「いのちの大切さ」や「感謝の心」、そして「困難に打ち勝ち未来へ向かってたくましく進もうとする強い心」を子どもたちにはぐくんでいくための教材として作成したものです。また、震災に関わるエピソードを豊富に掲載していることから、震災の記録集としての側面もあります。

本資料集は、県内の公立図書館はもとより、全国の自治体、都道府県教育委員会や市町村教育委員会、国会図書館、都道府県立図書館、教育学部や教員養成系のある国公立大学などにも配布しています。\*福島県教育庁義務教育課のホームページで閲覧やダウンロードが可能です。



これまで、遠く石川県や愛知県などからも、本資料集の活用について問い合わせがあり、震災後の福島県の状況や福島ならではの道徳教育について理解を図っています。また、震災や原発事故への正しい理解と被災者の心情に寄り添った言動につなげるためにも本資料集の活用を推進しています。

今年度、小・中・高等学校という校種別に、児童生徒用の分冊【小・中・高等学校版】を各学校に配布しました。これまで以上に本資料集の活用の幅を広げていきたいと考えています。

お近くの公立図書館にもありますので、ぜひご覧ください。

## ▶道徳が「特別の教科」に！◀

平成30年度から小学校で、平成31年度から中学校で、「特別の教科 道徳」（道徳科）が始まります。「教科」とは、教科書を使用し、\*教科ごとの免許があり、数値による評価を行うものですが、道徳については、数値による評価を行わず、担任の先生が担当することから、特に「特別の教科」という新たな位置付けが設けられました。

「道徳科」では、道徳的な価値を自分のこととしてとらえ、よく考え、議論する道徳へと転換し、特定の考え方に無批判で従うような子どもではなく、主体的に考え未来を切りひらく子どもを育てていきます。

また、「道徳科」では、特定の価値の押し付けや数値で評価することはしません。評価を入試で活用することはありません。「道徳科」の評価は、「道徳科」の授業で子どもたちが自分のこととして考えている、他人の考えなどをしっかり受け止めているといった成長の様子をていねいに見て行う、記述による「励まし、伸ばす」積極的評価を行います。

\*中・高等学校においては当該教科の免許



## 「道徳の時間」の授業参観を推進しています！

県教育委員会では、「道徳の時間」の授業参観を推進しています。

県内全ての小・中学校を対象に行った調査では、79.6%の学校が、2学期までに「道徳の時間」の授業参観を行いました。この中には、授業に保護者の方々も参加し、子どもたちと一緒に考えたり意見を交流したりする授業もありました。

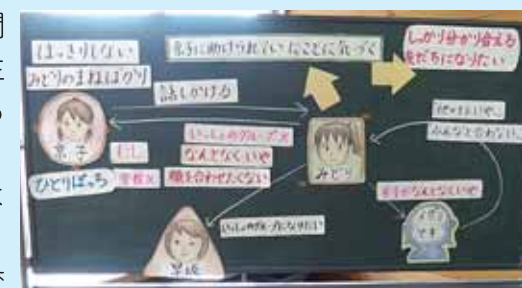


3学期には、15.6%の学校が授業参観を予定しています。

子どもたちの豊かな心をはぐくむ道徳教育には、家庭や地域との連携がとても重要です。今後も、道徳教育へのご理解・ご協力をよろしくお願いいたします。

## 学校では、どんな授業が行われているの？

年間35時間（小学校1年生は34時間）ある「道徳の時間」での指導を、より効果的に行うために、各学校において先生方はさまざまな工夫をしています。



H小学校では、45分間という限られた時間を有効に使う一つの手段として、黒板とは別に移動黒板に教材の内容をまとめ、話の流れが一目でわかるような工夫をしていました。

これにより、子どもたちは、問題点をすばやく把握して、自分の考えを伝えたり友達の考えを聞いたりする時間を多く確保することができました。これは、「考え、議論する道徳」の授業の実現に向けた第一歩となりました。

Y小学校では、子どもたちが、教材に出てくる主人公の状況をとらえ自分のこととして考えることができるように、ペープサートを使っていました。ペープサートの

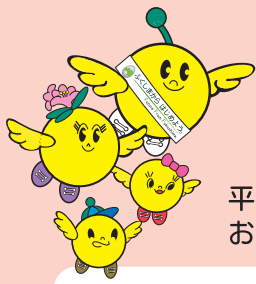


使用は、一年生という発達の段階にふさわしく、子どもたちが「主人公」の気持ちになって即興的に役割演技を行うことができました。

このようなペープサートのほかにも、動きや言葉をまねて理解を深める動作化の工夫や音楽、所作、その場に応じた身のこなし、表情などで自分の考えを表現する工夫などもよく行われています。

また、実際の場面の追体験をしたり、あいさつやていねいな言葉づかいなどの具体的な道徳的行為などをしたりすることもあります。

教えこむのではなく、子どもたちがじっくり考えていくことができるようにするために、先生方はさまざまな工夫をしています。



# 「モラル・エッセイ」コンテスト最優秀作品

県教育委員会では、毎年「モラル・エッセイ」コンテストを行っています。今回ご紹介するのは、平成28年度の部門別最優秀作品です。次は、みなさんの心温まる体験談やすてきなエピソードをぜひお聞かせください。

## 中学生の部 「夏の日」

福島大学附属中学校 3年 過足 俊介

毎年、夏になると思い出すことがあります。東日本大震災時の福島原発の事故から初めての夏。私は夏休みを利用し、少しでも空気のきれいな所へ避難しようということで、家族で北海道に行きました。

その頃はまだ、放射能に対する情報や知識が、広く正確に伝わっていた訳ではなかったため、どこへ行っても、福島から来たというと、「大変だったね。頑張ってるね。」という言葉と一緒に、一瞬びくっとしたような、どこかおどおどとしたような感じが伝わってきて、少しだけ悲しい気分になりました。

函館の朝市に立ちよった時のこと。冷えた夕張メロンを切ったものが食べられる店を見つけ、買って食べることにしました。店のおじさんに聞かれ、福島から来たかと伝えると、「福島は、高校野球、甲子園に行くの聖光っていう高校だけ。おじさんは福島好きだから応援してるんだ。もう一つ食べな。」とメロンを渡してくれました。とても甘く、おいしいメロンでした。「大変だったね。」とか「頑張ってるね。」とかいう言葉ではないのに、なぜかとてもうれしく感じたのを覚えています。聖光学院高校が甲子園出場と知っていたのも、野球好きというだけではなく、福島を気にかけてくれていたからではないでしょうか？そして、福島が好きだと言ってくれました。高校野球を応援すると同時に、「福島」を応援してくれていると感じました。「福島が好きだから応援しているんだ。」おじさんの言葉は、とても優しく、温かく、私の心の中にすうっとしみ込んでくるようでした。

原発事故から5年以上が経ち、福島も少しずつ復興が進み、私も福島で元気に頑張っています。夏になると、おじさんの優しい笑顔と、甘くおいしかったメロンの味を思い出します。

## 高校生の部 「覚えていてくれた」

福島県立盲学校高等部 2年 鶴岡 涼

私は昔から大がつくほど、ひいじいちゃんひいばあちゃんっ子でした。畑仕事、たばこの買い出し、ラーメン屋、井戸端会議、どこへでもついて行きました。「ほら、行くぞ。」と笑いかけてくれる二人の顔が何よりも大好きでした。

私は小学校1年の時に今と同じ0.04ほどの視力になりました。今まで見てきた景色はぼやけ、はっきりしなくなっていく中で、沢山の物が見えない苦しみよりも、二人の笑っている顔が見えづらいことの方が苦しくて、痛くてたまりませんでした。

そんなある日。二人は、悲しげな顔をしていた私に、「涼、いいか、目が悪いってのは普通とは少し違うんだぞ。異常って意味じゃねえ、特別なんだ。目が見えない分、涼は物事の判断を全身を使って決めるんだぞ。そうすれば、俺達みたく、人の価値を視覚に頼る普通の人間でなくて、内面を見て判断できる特別な人間になれるんだからな。」

この言葉には、今まで幾度となく救われてきました。

今年87歳になる二人はボケがひどくなってきていました。もしかしたら、もう名前がスムーズに出てこないかもしれないと思いながら、3か月ぶりに足を運びました。

ひいばあちゃんはボケはありましたが、物忘れがある程度でした。ひいじいちゃんは思っていたよりも弱々しく、一人ではご飯を食べることも歩くこともできないようになっていました。しかし、私の姿を見たひいじいちゃんが、さっき食べたことも覚えていられないひいじいちゃんが、「涼、来たのか。」と、いつもより数段優しい笑顔で私に話しかけてきたのです。ひいじいちゃんの目には少し涙がたまり、流れていきました。「そうだよ。久しぶりだね。」と言いながら、大粒の涙が流れていました。

## 一般の部 「受け取った思い」

道川 千穂

箱から溢れ出た鶴、鶴、鶴。色とりどりの折鶴たちが仮設校舎に彩りを添える。この鶴たちは、遠くウクライナの地からやってきた。たくさんの人々の思いをのせて。

チェルノブイリ原発事故から30年。東日本大震災から5年が経った今年5月、「ピースオンウィング～翼に平和をのせて～」という平和事業が大熊町で行われた。翼に平和メッセージを書き込んだ折り鶴を贈り合い、悲劇を繰り返さないために、子どもたちが学び・感じ・考えることが目的である。

会場で、チェルノブイリ原発事故当時、6歳だったナターシャさんは、<sup>りゅうちょう</sup>流暢な日本語を駆使し、優しく語りかけてくれた。故郷に帰れない日々のこと、心の支えとなった音楽のこと、広島で被爆した佐々木禎子さんの折り鶴との出会い、そして、ウクライナの人々が折り鶴に込めた思いを、<sup>しんしん</sup>真摯な言葉の数々に、胸がつまる。「ウクライナの人たちは、初めて鶴を折った人がほとんどです。日本の方に比べたら、上手とは言えない鶴ですが、鶴に込められた気持ちを受け取ってください。」

受け取った箱は、ずしりと重く感じた。箱いっぱい鶴たちは、たしかに<sup>つたな</sup>拙い。けれど、<sup>あたたか</sup>温かい光をまとっていた。たどたどしい日本語で書かれた言葉は、「子どもたちに明るい未来を！」国境を越えて、祈りが重なる。

原発事故のことは、月日とともに人々の記憶から薄れていく。避難先で過ごす時間が長くなればなるほど、子どもたちの故郷は避難先になる。いつまで避難が続くのか、何が最善の選択なのか、大人でも不安に押しつぶされそうになる夜がある。そんな人は、決して私一人ではないだろう。

くじけそうな時は、ナターシャさんの言葉を思い出したい。「故郷は一つじゃなくても良い。美しい故郷の記憶を心に持ち続け、好きなことに打ち込んでいきましょう。素敵な出会いがある明日に向かって、頑張って生きていきましょう。」